



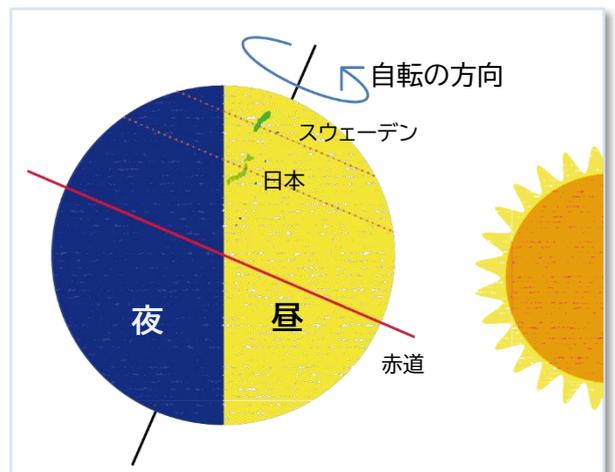
げし いど かわ 夏至、緯度が変われば

「夏至」、私はこの言葉をきくと、子どものころに読んだ物語の中の情景が浮かんできます。アストリッド・リンドグレンが書いた、家が3軒しかないスウェーデンの小さな村のお話です。そのなかに、にぎやかな夏至のお祭りの話がありました。私は「夏至」と言う言葉に、にぎやかさ、楽しさを思い浮かべます。そういえば、シェイクスピアの「夏の夜の夢」も夏至の日の夜が舞台です。多様な登場人物のにぎやかで不思議、おかしな一晩の夢の物語ですね。

天文学では、「夏至」とは太陽が春分点から90度離れた「瞬間」の事です。プラネタリアムでは「昼が一番長い日」、「太陽が最も高く上る日」などと解説をします。

今年の夏至は6月21日です。東京では朝の4時24分に太陽がのぼり、日の入りは19時1分ですから、昼間はおよそ14時間もあります。

太陽が空のどのくらいの高さに見えるかは、緯度によって違います。私が読んだ物語の舞台、スウェーデンは、日本よりも緯度の高いところにあります。そのため、太陽の高さ(南中高度)は東京よりも高くなりません。しかし、緯度が高いため、太陽の1日の運動(日周運動といいます)の経路の大部分が地平線の上に見られることとなります。その結果、朝は2時34分に太陽がのぼり、日



の入りは21時1分となり、18時間以上太陽は沈みません。もっと緯度の高い場所、つまり北に行くと、太陽は地平線をはうように、1日中沈まないということになります。これが有名な白夜(White Night)、そして1日中太陽がのぼらない極夜(Polar Night)があります。

夏至のお祭りは、キリスト教由来の行事とそれまでの祝祭が合わさったものでしたが、現代では長い冬が終わり、夏の到来を祝う意味が加わっています。日本では梅雨の時期ということもあって、あまり夏至を意識することはないかもしれませんが、北極に近い場所ではようやく訪れた夏に心おどらせ、お祭りを楽しむのでしょうか。